倭国の創生期

大川直士

1. 緒言

中国の史書により、弥生時代には倭または倭人とよばれる人種がいて、奴国や邪馬台国を作ったことがわかっている。また、中国大陸にも倭または倭人とよばれる人たちがいたことがわかっている。百科事典には、倭人とは、広義には中国の歴史書に記述された、中国大陸から西日本の範囲の主に海上において活動していた民族集団であり、狭義には中国の人々が名付けた、当時、西日本に住んでいた弥生人の呼称であると記述されている。しかし、倭（倭人）は縄文時代には日本列島にいなかった。新石器時代の日本列島に住んでいた縄文人は形態人類学上では古モンゴロイドに属し、弥生人骨とは明らかに異なっている。倭（倭人）がどこからか日本列島に渡ってきたことは明らかである。そして、倭（倭人）が作った奴国王は後漢に使者を送って『漢委奴国王』の金印を授けられ、邪馬台国の女王卑弥呼は魏に使いを送って『親魏倭王』の金印を授けられたことがわかっている。現在、古代史においては邪馬台国が何処にあったのかが最大の関心事になっている。しかし、倭（倭人）が日本列島に渡ってきて奴国や邪馬台国を作った過程は明らかになっていない。この研究の目的は、倭国の創生期の歴史を明らかにすることである。

2. 倭と倭人

２－１　文献・碑に記された倭と倭人

三国志の魏志東夷伝における日本関係の記述は「倭人在帯方東南大海之中」で始まるが、三国志から約 150 年後に范曄によって編纂された後漢書東夷伝では「倭人」が「倭」に改められて「倭有韓東南海中」と記述されている。ところが、唐の時代に房玄齢によって編纂された晋書四夷伝では、魏志東夷伝と同様に倭人と記述されている。また、晋書に続く宋書蛮夷伝からは「倭国」に変わり、旧唐書東夷伝には倭国から日本国に国号を変更したと記されている。従って、日本の呼称は、倭から倭人、倭国、日本国へと変化したと考えられる。中国正史の列伝で民族に関する記述が「民族名＋人」で始まる例は極めて珍しく、魏志東夷伝と晋書四夷伝の「倭人」以外にはない。

後漢の時代に王充が書いた論衡という歴史書に、「周の時、天下泰平にして、倭人来たりて暢草を献ず」「成王の時、越裳は白雉を献じ、倭人は暢草を献ず」と記されている。成王は周の第２代皇帝で、紀元前 1021 年に没した。従って、後漢よりも遙かに古い紀元前 11 世紀には「倭人」と呼ばれる人たちがいたことがわかる。越裳は百越ともいわれ、長江の南に居住していた。暢草（鬯草）は中国の南部に自生する鬱金草のことであるから、倭人も中国南部の長江の近くに居住していたと考えられる。また、魚豢が編纂した魏略には、「その（倭人の）過去の話を聞くと、自ら太伯の後と言う」と書かれている。太伯は周の古公壇父の長男であるが、弟の季歴に周王を譲って、蛮地に呉を興した。呉は現在の江蘇省辺りにあった。従って、日本列島の倭人は江蘇省辺りから遷ってきたことになる。さらに、1976 年、安徽

省亳県の元宝坑村１号墳から発見された磚に「有倭人以時盟否（倭人、時を以て盟することありやなしや)」とある。安徽省は江蘇省に隣接し、清朝が分割するまでは江蘇省の一部であった。

倭人は後漢書鮮卑伝にも登場し、檀石槐という英雄が食料の不足を補うために、網で魚を捕らえるのが上手いと評判の倭人国を撃ち、千余家を捕らえて秦水のほとりに移し、魚を捕らえさせて食糧の助けとしたと記されている。この倭人国は、魏志鮮卑伝では汗国となっている。春秋時代に、現在の江蘇省淮安市に邗という諸侯国があり、呉によって滅ぼされた。呉王は邗江に城を築き、長江と淮河を結ぶ運河（邗溝）を掘った。このため、干（カン）は呉の別名となり、呉越は干越とも表現される。つまり、檀石槐が撃った倭人国は江蘇省にあったのである。このように、全ての資料は、倭人は江蘇省にいたことを示す。また、後漢書鮮卑伝には倭人国と記されていることが注目される。このことは、倭と呼ばれる民族と、倭人とよばれる民族がいたことを示す。

一方、紀元前４世紀～３世紀に成立した山海経には、「蓋国は鉅燕の南、倭の北にあり。倭は燕に属す。」と記されている。燕は戦国七雄の一つで、河北省北部、現在の北京を中心とし、最盛期には朝鮮半島をも支配した。中国大陸には燕の南に斉があったことから、蓋国は朝鮮半島にあったものと推察される。従って、倭は朝鮮半島の南部にいたことになる。また、後漢書東夷伝韓の条（後漢書韓伝）と魏志東夷伝韓の条（魏志韓伝）は、ともに倭は朝鮮半島の南部に居住していると記している。このように、資料上では倭人は江蘇省のみに、倭は朝鮮半島にのみ認められる（表１)。

表Ｉ　資料に認められる倭と倭人

倭		倭人	
資料	居住域	資料	居住域
山海経	朝鮮半島南部？	論衡	長江付近？
後漢書韓伝	朝鮮半島南部	後漢書鮮卑伝	江蘇省
魏志倭人伝	朝鮮半島南部	魏略	江蘇省
		元宝坑村１号墳磚	安徽省（江蘇省）

２－２　倭と倭人の相違

1939 年、山口県下関市豊北町土井ヶ浜で６体の人骨が入った石棺が露出しているのが確認され、その後の調査で 300 体を超える弥生人の骨が見つかった。出土した人骨の形質は縄文人のそれと異なり、中国山東省の遺跡から出土した前漢時代の人骨と非常に似ていた。この土井ヶ浜タイプの弥生人は福岡市などの北部九州からも見つかっている。ただし、吉野ヶ里付近で出土する人骨形質は、土井ヶ浜や福岡市等で出土する人骨形質と少し異なるといわれる。九州北部から出土する弥生人骨は江蘇省揚州市の前漢墓から出土した人骨と酷

似する。また、ミトコンドリア DNA の分析において、筑紫野市の隈西小田遺跡の弥生人と同じ塩基配列を持つ個体が、江蘇省徐州近くの春秋時代の梁王城遺跡および神墩遺跡で見つかっている[1)]。また、韓国の慶尚南道金海（キメ）市の弥生時代末から古墳時代に営まれた集団墓地である礼安里（イエアンリ）遺跡から出土した人骨は土井ヶ浜の人骨に酷似している[1)]。これらのことから、倭および倭人は、江蘇省、山東省および朝鮮半島に居住していたことが分かる。

水稲耕作は約 7000 年前の長江流域に始まり、紀元前 3000 年以降に山東半島先端部にまで拡がったと考えられている。長江流域は降水量が多く、気温も高くて水稲耕作に好適な環境である。このため、灌漑設備を用いて大区画の乾田に水を引いて水稲を栽培する現在に通じる耕作法が発達した。一方、山東半島は年間降水量が 750mm 以下のため、水田耕作を行うことは難しい環境である。このため、膠東半島の趙家荘遺跡に見られるように、谷間の小川やわき水を畦で堰き止めて小区画の水田とする農耕が行われた。韓国の慶尚南道蔚山市の玉峴（オクキョン）遺跡でも、谷間の小川やわき水を畦で堰き止めた小規模の水田跡が検出されている。これらのことは、朝鮮半島の倭は山東半島から渡ってきたことを示す。

山東省と江蘇省の間を東西に流れる淮河という中国第 3 の大河がある。淮河および秦嶺山脈を結ぶ線（秦嶺・淮河線）を境に、中国の南北では地理や気象条件などが異なり、伝統的に華北と華南の境界線とみなされている。山東省は黄河文明圏にあり、紀元前 1000 年頃に周の武王は殷を滅ぼして王朝を開くと、国師・軍師として周を支えた呂尚（太公望）の領地（斉）となった。一方の江蘇省は長江文明圏にあり、長江文明が周に滅ぼされた後は呉に引き継がれた。このように、淮河の北の山東に居住する倭と、淮河の南の江蘇に居住する倭は、物理的にも政治的・文化的にも断絶することとなった。このため、淮河の北に居住する倭に対して、南に居住する倭を倭人と称して区別されるようになったものと考えられる。

分子人類学者の崎谷によれば、長江文明の担い手は Y 染色体ハプログループ O2 系統（現在の呼称は O1b2 系統）である[2)]。崎谷は、長江文明の崩壊により一部の O1b2 系統は南下して百越と呼ばれ、他の O1b2 系統は北方へ逃れて山東省、朝鮮半島を経て日本列島へと渡り、また東や南の海に逃れたとしている。また、HLA（白血球抗原）ハプロタイプの分析によっても、B46-DR8 グループは中国大陸南部から直接、あるいは朝鮮半島を経由して北九州へ伝わったと考えられている[3)]。これらのことは、江蘇省にいた倭人は東シナ海を渡って北部九州に、山東省にいた倭族は朝鮮半

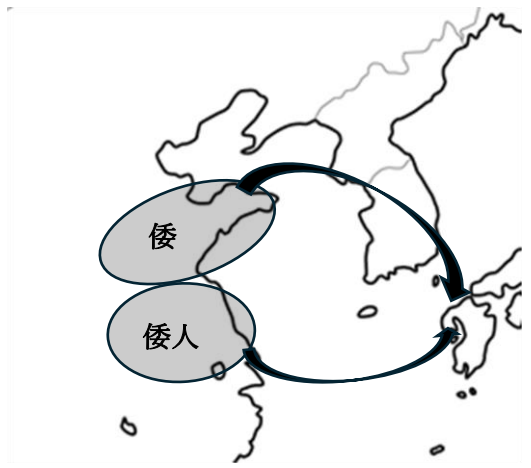

図 1　倭族と倭人族の渡来

島を経由して北部九州に渡ったことを示唆する（図１）。つまり、奴国を作ったのは倭族であり、邪馬台国を作ったのは倭人であると考えられる。但し、長江文明の崩壊（呉と越の滅亡）は紀元前 5 世紀であり、この時に長江付近にいた人びとが一気に山東半島と朝鮮半島を経由して日本列島に渡ってきたとは考えられない。山東省にいた倭族が朝鮮半島を経由して日本列島に渡ったのには、長江文明の崩壊とは別の原因があると考えられる。

3. 倭・倭人と弥生時代

３－１　弥生早期のはじまり

弥生時代は水稲耕作の伝播によって始まると考えられている。従来、水稲耕作は紀元前 400 年頃に朝鮮半島から渡ってきた渡来人によって伝えられたとして、この頃からを弥生早期、紀元前 300 年頃からを弥生前期、紀元前 200 年頃からを弥生中期、紀元後初頭からを弥生後期と区分してきた。しかし、近年、歴史民俗博物館（歴博）は炭素１４年代測定法を用いることにより、縄文晩期の水田跡を伴う菜畑遺跡（佐賀県唐津市）から出土した土器の付着炭化物は紀元前 930 年のものであり、弥生時代は従来説よりも 500 年遡ると発表した。歴博によれば、弥生早期は紀元前 1000 年頃から、前期は紀元前 800 年頃から、中期は紀元前 400 年頃から、後期は紀元前 50 年頃からである。この見解に対しては肯定的な意見もあるが、否定的な意見も多い。特に、元韓国国立慶尚大学教授の新井は、この方法の問題点を列挙して歴博の発表を厳しく批判している。特に、第 13 回アジア歴史公演会において「考古学における新年代論の諸問題[4)]」の表題で行った講演は、歴博が新聞発表した炭素 14 年代のデータと、その後のデータの比較を行うなどをしており、非常に理解しやすい。この講演で、新井は、新聞発表後の夜臼Ⅱa 期のデータ 10 件の平均値は新聞発表よりも 100 年新しい 2526 年で歴年では紀元前 7097 年～紀元前 536 年であること、夜臼Ⅱよりも古い山寺と夜臼Ⅰ期の炭素 14 年代の平均値は 2590 年で新聞発表の夜臼Ⅱ期よりも新しく出ていることを指摘している。このように歴博のデータには再現性が認められないので、真理を追究する自然科学の分野であれば論文としては受理されない代物である。

最近では、歴博の弥生時代区分は遡り過ぎているとの見解が主流である。しかし、歴博の発表は弥生時代の区分を見直す動きを引き起こし、様々な説が唱えられている。例えば、宮本[5)]は、山東半島の人々が紀元前 1600 年頃の寒冷化に伴う食料不足を解消するために朝鮮半島に渡り、さらに紀元前 770 年頃の寒冷化のために九州に渡って、水稲耕作を伝えたと述べている。紀元前 771 年、周の幽王は西北遊牧民族の犬戎に殺され、翌年、周王室は東遷して都を洛邑に移した。この後、周王室は弱体化し、諸侯が覇を争うようになったため、東周の時代は春秋戦国時代と言われる。しかし、この混乱が、朝鮮半島における民族の移動を起こしたことを示す証拠はない。宮本だけでなく、弥生の始まりを紀元前 6 世紀～8 世紀とする研究者は多い。しかし、これらの説はあくまでも推論に基づく仮説であって、文献または考古学の根拠がある訳ではない。

従来の弥生時代年代論を支持する研究者もいる。河野[6)]は「AMS 年代法の新年代観に従

えば、紀元前5世紀以降の東アジアの激動期に日本列島に逃れてくる人の波が何もなかったことになり、これはあり得ない」と述べている。橋口は、福岡県糸島市の曲り田遺跡で出土した鉄塊が紀元前 4 世紀のものであること等を根拠に、弥生時代の始まりは従来通りであるとしている[7]。これに対し、歴博は、弥生早期・前期の鉄器といわれる30数点の資料は殆どが時期を特定できないとして証拠から排除し、曲り田の鉄器も出土状況を示す図面や写真が公開されていないので弥生早期を比定する証拠が弱いとしている。また、歴博は、曲り田の鉄は、燕で鋳造鉄器が本格的に生産され始める紀元前 3 世紀以前にもたらされたことになるとして、橋口の説を否定している[8]。しかし、燕で鋳鉄が生産され始めたのは紀元前 5 世紀であるから、曲り田の鉄が紀元前 4 世紀にもたらされた可能性は全くないわけではない。また、菜畑遺跡では、水路を造るための杭の先端は鉄器によって削られたことが明らかになっている。歴博の新年代によれば、菜畑では、燕で鉄が生産されるようになるよりも500年も早い紀元前10世紀に鉄器が使われていたことになる。従って、菜畑で鉄器が使われていたという事実がある限り、歴博の新年代論は成立しない。しかも、歴博による橋口説批判の論拠は大きな矛盾を抱えている。歴博は、日本での鉄器の歴史の確実な始まりは山の神の時期（前期末～中期初頭）であるとしているが、歴博の新年代論によれば弥生中期は紀元前 400 年頃である。従って、新年代論においても、曲り田の鉄器は燕で本格的に鉄器が生産されるようになった紀元前 3 世紀以前に使われたことになる。歴博の論拠を突き詰めれば、燕での鋳鉄の生産が本格的に始まるのは紀元前 3 世紀であるから、弥生中期は紀元前200年頃に始まるとする従来の年代論が正しいことになる。

３－２　菜畑や曲り田の水稲耕作の担い手

菜畑遺跡や曲り田遺跡に朝鮮半島からの渡来人集団が居住して水稲耕作を行っていた物的証拠はない。住居跡は縄文時代特有のものである。曲り田遺跡で出土した無文土器は全体の 1%未満である[9]。支石墓は水稲耕作と共に朝鮮半島から伝わったと考えられているが、これまでのところ、支石墓から出土する人骨形質はすべて縄文人骨である[1]。大友遺跡（唐津市）の支石墓の人骨は、DNA分析によって縄文人骨であることが確認されている[10]。支石墓は佐賀県、長崎県、熊本県に分布し、それ以外の地域では検出されない。また、東背振村（現吉野ヶ里町）の戦場ヶ谷遺跡や西石動遺跡、南島原市の原山支石墓群、大村市・諫早市の風観岳支石墓群のように山間地や、佐世保市宇久島の宇久松原遺跡や平戸市大島の大根坂支石墓のような離島、耕地が全くない唐津市呼子町の大友遺跡のように、水稲耕作には不向きな所でも支石墓は検出される。また、宇久松原遺跡、新上五島町の浜郷遺跡、および長崎市深堀町の深堀遺跡で出土した弥生人骨は縄文人骨と極めて強い類似性が認められている[11]。また、肥前国風土記によれば、値嘉島（宇久島）には隼人に似た風貌と言葉を話す人たちが住んでいた。このように、支石墓は縄文人の居住区にあった可能性が高い。さらに、宇久松原遺跡2遺構、浜郷遺跡1号遺構および鹿児島県出水郡長島町の明神下岡26号遺構は、南九州と九州西岸や島嶼部（天草諸島の長島や下島、佐世保市の高島、五島列島の宇久

島、新上五島町の中通島）に分布する板石積石棺墓の祖型と考えられている[12]。これらのことから、支石墓制は縄文人によって営まれ、縄文人が居住する佐賀、長崎を経て熊本に伝わり、さらには板石積石棺墓に形を変えて南九州の縄文人に伝わったものと考えられる。

板石積石棺墓域の東端の都城市の坂本Ａ遺跡で縄文時代末期の水田跡が検出されている。北郷によれば、孔列文土器・大陸系磨製石器・擦り切り石包丁などの初期稲作に伴う遺構と遺物の出土地は、九州の北部と南部に集中する（図２）[13]。これらの遺構・遺物の検出地は、北部九州では支石墓の分布とオーバーラップし、南九州では板石積石棺墓の分布域とオーバーラップする。都城市や諸県郡等の宮崎県南部では、弥生遺跡から出土する人骨でさえ縄文人タイプのみであって、渡来人タイプのものは皆無である。従って、この地域で水稲耕作を行っていたのは渡来系弥生人ではなく、縄文人であるとしか考えられない。これらのことは、玄界灘沿岸における水稲耕作の開始をもって弥生時代の始まりとする考え方に疑問を抱かせる。菜畑や曲り田で水稲耕作を行っていたのは縄文人である可能性が高い。

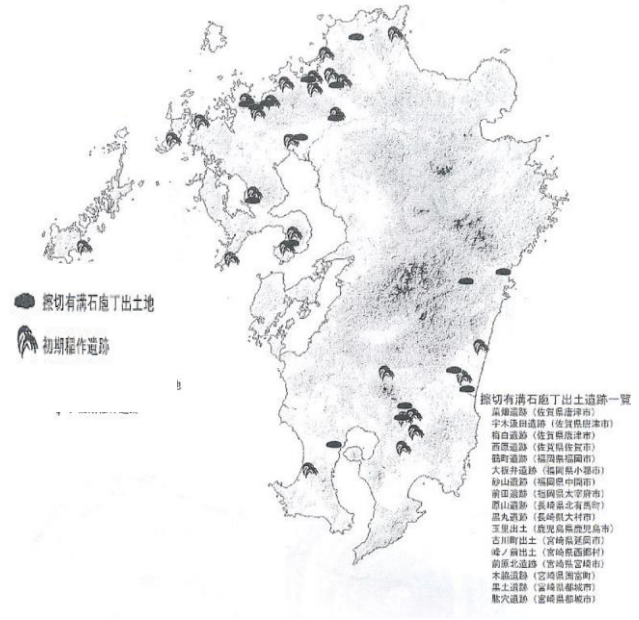

図２　初期稲作の遺構と遺物の分布
（出典：北郷泰道「南九州の果実と結実～第３の弥生文化とそれから」）

３－３　水稲耕作の伝播経路

佐藤[14]は、中国・朝鮮・日本の水稲（温帯ジャポニカ）の SSR(Simple Sequence Repeat) マーカー領域を用いた分析調査で SSR 領域に存在する RM1-a から h の 8 種類の DNA 多型を調査し、中国には RM1-a～h の 8 種類があるが、朝鮮半島では RM1-b が存在せず RM1-

a がもっとも多いこと、日本には RM1-a、RM1-b および RM1-c の 3 種類が存在し、RM1-b が最も多いことを見いだした。これは日本育種学会の追試によって再現が確認されている。この結果から、佐藤は現在の水稲耕作は江南から直説伝わったとの見解を述べている。

朝鮮半島では蔚山市のオクキョン遺跡で小区画水田跡が顕出されているが、板付遺跡のような本格的な灌漑技術を用いた水田跡は検出されていない。水稲耕作には種苗法（田植え法）と直播法があり、江南と日本では古代より種苗法による水稲耕作が行われてきたが、朝鮮半島では李氏朝鮮の後半まで直播法が行われていたとされる。農業技術史の専門家である河野[6)]によれば、直播法は降水量が少ない朝鮮半島に適応した水稲耕作である。朝鮮半島の直播法には、「水田に種籾を直播きし、土で覆った後に灌水する水耕法」と「乾田の状態で播種してその後も畑状態で成長させ、雨期の雨が降れば灌水してその後は水田で育てる乾沓耕作法（かんとうこうさくほう）」があって、後者は朝鮮でのみ広く行われた技術であるとされる。山東半島から朝鮮半島に伝わった水稲耕作技術は、谷間の小川や湧き水を利用した直播水耕であったから、その延長線上に平野部での乾沓耕作法が編み出されたものと考えられる。河野は、九州の実播（みまき）・実植（みうえ）、および関東の摘田（つみた）・蒔田（まきた）が乾沓耕作法であるとして、朝鮮半島から乾田乾耕法が、江南から育苗法（田植え法）が伝わったとする 2 段階・2 系統伝播論を唱えている。

このように、生物学・農学の研究者の間では、日本の水稲は江南から直説伝わったと考えられている。しかし、古代史研究者の間では、「江南系稲作民が現実に渡ってきていたのなら、その痕跡が何かあって然るべきだが、それが全くない」として江南からの直説伝播を否定し、石包丁等は朝鮮半島から伝わったことは確実であるとして朝鮮半島経由説を支持する見解が主流である。しかし、遺伝子の解析の結果こそが、水稲は江南から直説伝播したことを示す動かしがたい証拠である。また、近畿地方の石包丁は朝鮮型ではなく、江南型である[15)]。また、日本の蚕には 3 眠蚕と 4 眠蚕が存在し、前者が華北と朝鮮半島に、後者は華中・華南に存在する。さらに、鵜飼は中国南部と日本には存在するが、朝鮮には存在しない。これらのことは、少なくとも江南から九州に渡ってきた人たちがいたことを示す。

3－4　渡来系弥生人の渡来

人の移動は戦乱によっても引き起こされる。現在でも、世界各地で戦火を逃れて他国に移り住む多数の難民がいる。歴史上でも、辰韓は秦の圧政から逃れてきた人たちによる国である。また、百済が滅亡した際には多くの高官が日本に渡ってきた。倭についても、北宋第五皇帝の英宗の詔によって司馬光が編纂した資治通鑑には、「周の元王三年（紀元前 473 年）に越が呉を滅ぼしたので、その支庶が海に逃れて倭となった」と書かれている。ウィキペディアによれば、資治通鑑が成立したのは 1068 年であるが、その内容は正史に記載されていない野史や家伝、瑣説などの 322 種にのぼる豊富な資料に基づいて記載されていて、その資料価値は高く評価されている。また、魏略によれば、倭人は呉の太伯の後裔を自称していた。従って、紀元前 470 年頃に倭人が渡ってきたことによって弥生時代が始まったと考え

られる。このことを裏付けるのが、福岡県小郡市の力武内畑遺跡（弥生時代前期前葉：板付Ⅰ式～板付Ⅱa 式期）の水田関連遺構である。歴博は、遺構の井堰の杭と矢板の炭素１４年代を測定した結果は 2410～2145 ^{14}C BP（紀元前 410 年～紀元前 145 年）であったと発表した [16]。この結果は歴博の歴史観（弥生前期は紀元前 800 年頃から始まるとする歴史観）よりも著しく新しいものである。歴博は、この原因として、井堰が前期後半～中期前半に補修・改修された可能性や、弥生時代中期の集落遺跡が埋もれている可能性を挙げている。しかし、上述したように歴博の新年代論は疑わしい。一方、紀元前 473 年の呉越戦争に敗れた倭人族が水稲耕作を北部九州に渡ってきたとすれば、この測定結果は理にかなっている。

弥生時代の北部九州を代表する遺物は甕棺である。小児用の小型甕棺は縄文時代からあったが、大型化した二つの甕の口を合わせ中に遺体を入れる合わせ口甕棺が用いられるようになるのは弥生時代になってからである。中国では甕棺墓は紀元前 4000 年頃から見られ、戦国時代末まで長江中下流域に存在した。従って、倭人族が水稲耕作とともに大人用の甕棺墓制を日本に伝えたと考えられる。初期の甕棺墓は 5～10 基の少数に留まり、その殆どが、支石墓の分布と重複するように，西北九州，唐津，糸島，早良，小郡・鳥栖の西部，神埼，佐賀，島原，熊本に偏った分布をとる [17]。特に、福岡県糸島市の新町遺跡では、支石墓域に隣接して甕棺墓域が存在している。これらのことは、九州に逃れてきた少数の倭人が新たな土地で生きてゆくために、生活の基盤が整っている縄文人の集落付近に住みついたことを示唆する。これまでも、日本列島では東アジアで行われたような民族間の争いは起こらず、渡来人は先住系の人びと平和共存の道を選んだと推定されていたが [2]、この所見は縄文時代末期～弥生時代前期の九州では民族間の争いがなかったことを改めて示唆する。

橋口 [18]は、甕棺の編年をＫＩ式（弥生時代前期）、KⅡ式（中期前半）、KⅢ式（中期後半）、KⅣ式（後期前半）および KV（後期後半）とした。橋口氏によれば、ＫＩ式期の前の時代（曲り田式土器・夜臼式土器～板付Ⅰ式土器の時代）には、糸島市の長野宮ノ浦遺跡や新町遺跡で甕棺が出土していて、これらの甕棺は既に大形化が認められる。ＫＩａ式期になると、糸島市の石崎矢風遺跡や三雲加賀石遺跡で甕棺群墓が認められるようになり、石崎地区では 90ｃｍを超える大形甕棺が出土する。大型甕棺は板付Ⅰ式段階には小郡・鳥栖の東部に，伯玄社式段階（橋口編年ではＫＩａおよびＫＩｂ）になると福岡・春日，二日市，朝倉，筑後南部へと拡大し，墓地の規模も拡大して 10 基以上群集する例が多くなる [15]。

ＫＩ式期の前の時代（夜臼式土器～板付Ⅰ式土器の時代）になると、福岡平野を中心に江辻遺跡、板付遺跡、那珂遺跡などの環壕集落が出現する。朝鮮半島の環壕集落は蔚山（ウルサン）、大邸（テグ）、昌原（チャンウォン）、晋州（チンジュ）など、慶尚道とよばれる半島南東部に集中している [19]。この地域は日本の弥生文化と共通する遺物が出土することから、後漢書東夷伝韓の条（後漢書韓伝）に記された倭族の居住域であると考えられている。従って、倭族が九州に江辻遺跡等の環濠集落を伝えたと考えられる。また、これらのことは、倭族の渡来は倭人族の渡来よりも遅かったことを示す。朝鮮半島では、紀元前 4 世紀後半に燕が朝鮮半島の南部まで侵攻するという事件（燕・古朝鮮戦争）が起こった。この時、朝

鮮半島南部にいた倭族が戦乱を逃れて玄界灘を渡ってきたと考えられる。

江辻遺跡の第２地点といわれる板付遺跡と同時期の環濠集落から検出された11軒の竪穴住居跡は全て松菊里（ソングンリ）型である。朝鮮半島の松菊里型住居跡は、主に南西部の三韓時代に馬韓（後の百済）があった地域に分布し[20]、倭族が居住していた半島南東部では少ない。従って、朝鮮半島からは倭族のみならず、後に馬韓を形成した人びとも北部九州に渡って来て、倭族と江辻に共住していたと考えられる。現在の朝鮮民族は、馬韓、辰韓、弁辰、高句麗等、複数の民族が混血した民族であるので、紀元前５世紀に日本に渡ってきた人びとを古朝鮮族と呼ぶことにする。日本人と韓国人のミトコンドリアDNAハプログループが殆ど同じであるのは[21]、古朝鮮族が日本列島に渡ってきたためであるに違いない。また、このことが、後世において百済が倭国の友好国になった理由であると考えられる。

３－５福岡平野による初期弥生社会

福岡市の板付遺跡は日本列島最初の弥生村と言われ、高度の灌漑技術を用いた水田跡が検出されたことで有名である。しかし、日本における本格的な水稲耕作は、必ずしも板付で始まったわけではない。福岡市の野多目でも、夜臼Ⅰ式期に既に板付と同様の水稲耕作が行われていた。また、有田七田前遺跡と那珂遺跡でも、まだ水田跡は確認されていないが石包丁など水稲耕作を行っていたことを示す遺物が出土していることから、夜臼Ⅰ式期に水稲耕作が行われていたことが確実視されている。福岡平野の土器は夜臼Ⅰ式、夜臼Ⅱ式、板付Ⅰ式、板付Ⅱ式と変化していくが、夜臼Ⅱ式と板付Ⅰ式の間に、板付Ⅰ式に変化するＡ系統の祖型甕と、板付Ⅰ式に変化しないＢ系統の祖型甕がある[22]。Ａ系統の祖型甕は玄界灘沿岸の一部の集落で見られるのに対し、Ｂ系統は有明海沿岸地域にも存在する。従って、Ａ系統の祖型甕は朝鮮半島からの渡来人によって、Ｂ系統の祖型甕は江南から渡ってきた倭人族によって作られたと考えられる。

野多目遺跡、有田七田前遺跡および那珂遺跡で出土する祖型甕はＢ系統のみであり、集落は板付１式古段階までで消滅する（図３）。板付遺跡と御笠川を挟んで対峙する形で存在する雀居遺跡では、水田は検出されていないが、溝から農業関連遺物が出土することから、水稲耕作が行われていたこと確実視されている。この遺跡では板付１式古段階まではＢ系統の社会であったが、板付１式新段階からＡ系統の社会に変わる。板付遺跡では板付１式古段階まではＡ系統とＢ系統が存在するが、Ｂ系統は古段階で消滅し、新段階からはＡ系統の社会になる。板付遺跡の屈曲甕の胴部突帯のすぐ上の部分には傾斜変換点はないのに対し、雀居遺跡や那珂遺跡の屈曲甕の同じ部位には傾斜変換点を明確に確認できる。この屈曲甕にみられる形態上のクセは、有田遺跡の屈曲甕にもみられる[22]。従って、有田遺跡は屈曲甕の段階までは雀居や那珂と同じ社会（Ｂ系統）であったものが、祖型甕の段階で板付型の社会（Ａ社会）に変わったものと推察される。これらのことは、福岡平野で水稲耕作をはじめたのは倭人族であるが、倭族が倭人族に替わったことを示唆する。そもそも、河野[6]によれば、朝鮮半島には板付のような水稲栽培技術はなかった。実際に、江辻遺跡では水稲耕

作を行った形跡が全く見えない。また、倭人族が居住していなかった宗像および豊前地方では弥生初頭の稲作関連遺跡はみつかっていない。これらのことから、遅れて福岡平野に渡ってきた倭族と古朝鮮族が倭人族から土地を奪い、倭人族に倣って水稲耕作を行ったものと推察される。北部九州で朝鮮系の石包丁のみが出土するのは、朝鮮半島からの渡来人が北部九州を席巻したためであると考えられる。

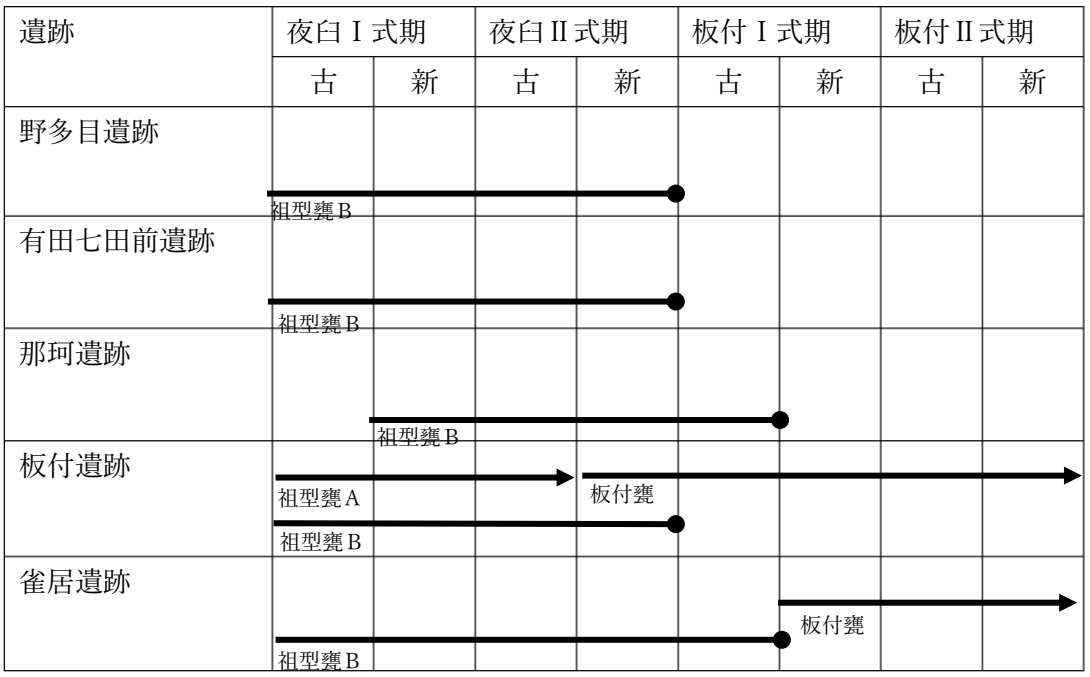

図３　福岡平野における弥生早期・前期集落の祖型甕

４．渡来人種の棲み分け

４－１環濠集落と環壕集落

日本の環濠には水を湛えたものと土を掘ったのみのものがあり、寺沢は、環壕（土偏のほり）と環濠（水偏のほり）を峻別すべきとしている[22]。環濠集落のルーツは長江中流域の稲作地帯にある。約 7000 年前の城頭山遺跡（湖南省常徳市澧県）は水濠で囲まれた環濠集落であり、散播農法による水稲栽培が行われていた。大渓文化（紀元前 4500 年頃～紀元前 3300 年頃）では灌漑農法が確立され、住居地は水の補給のための水辺から大規模に農耕を行う事の出来る平野部に移動した。長江流域の環濠の断面形状については不明であるが、恐らく U 字状あるいは逆台形状であると推察される。弥生前期の北部九州では、環濠集落は検出されていない。但し、有田七田前遺跡では台地縁部を巡る川状構造が検出され、環濠的性質を有する可能性が指摘されている[24]。また、雀居遺跡では台地の縁辺を巡る自然流路の溝状遺構が検出されている[25]。これらの溝状構造や川状構造は、江辻遺跡が不完全な環壕集落であるように、環濠集落の祖型であるかもしれない。

環壕遺跡のルーツは内蒙古自治区赤峰市の興隆窪遺跡である。この環壕文化が日本に伝わったルートは二つあり、一つは中国東北部、沿海州を経て、北海道・東北地方に至るものである。他の一つは山東半島・朝鮮半島を経由して北部九州に至るものである。韓国の環壕集落は丘陵地に立地するものが多く、中には南山遺跡のように比高 90m に達する高地性集落もある [19]。九州の弥生初期の環壕遺跡である粕屋町の江辻遺跡、福岡市の有田遺跡、那珂遺跡および板付遺跡も台地または中位段丘上にあり、環壕の断面は朝鮮半島の環壕の断面と同様に V 字状である。

４－２　環濠・環壕集落が示す弥生前期の福岡平野の状況

表 2 に、上記の A、B の 2 つの社会と環濠・環壕の関係をまとめた。有田遺跡および板付遺跡は A 系統の社会（倭族）の社会であるから、V 字状の環壕集落を持つことは理にかなっている。また、有田七田前遺跡と雀居遺跡は B 系統の社会であるから、環濠状の構造を有することも理にかなっている。しかし、那珂遺跡は祖型甕 B 系統（倭人族）の社会であるとすれば、V 字状の環壕集落であることは矛盾している。但し、有田遺跡と板付遺跡の環濠は一重であるが、那珂遺跡の環壕は二重である。そして、外壕は V 字状であるのに対し、内壕は逆台形上であるので、これは水を湛えていない環濠であると思われる。即ち、那珂遺跡の内壕は集落内の倭人たちによって、外壕は集落外の倭族によって築かれた可能性がある。倭人たちは逆台形状の環壕を築いて倭族の攻撃に対する防御を固めたが、倭族は更にその外を V 字壕で囲んで、倭人の集落を封鎖したのではないだろうか。那珂遺跡では内壕が

表 2　福岡平野の遺跡の特色

系統	遺跡	環壕・環濠			備考
		種類	数	断面	
A	有田	環壕	一重	V	弥生時代後期まで継続
	板付	環壕	一重	V	近世までの
B	那珂	環壕	二重	V、逆台 [1]	板付Ⅰ式古段階で消滅
	野多目	―	―	―	夜臼Ⅱ式新段階で消滅
	有田七田前	環濠？[2]	一重	―	夜臼Ⅱ式新段階で消滅
	雀居	環濠？[3]	一重	―	板付Ⅰ式新段階から A 系統に変化

1）内壕は逆台形で外壕は V 字状　2)川状構造が環濠的　3)自然流路の溝状遺構有り

埋め立てられる直前に土器が一気に投棄されたのは [23]、倭族に攻められた人びとが集落を捨てたためであると考えられる。環濠集落も、倭族が福岡平野を席巻していたことを示唆する。

４－３　弥生前期の渡来系弥生人

考古学会では、寺澤氏の環濠と環壕を峻別すべきとの見解は必ずしも受け入れられておらず、水の有無に拘わらず環濠集落とされている。従って、筆者は、環濠と環壕の峻別が明らかにされていない場合には、環ゴウ集落と呼ぶことにする。朝鮮半島の環壕の断面はＶ字を主体とするが、日本の環ゴウ集落ではＶ字溝だけでなくＵ字溝や逆大形状溝が検出される。これは、長江流域の環濠の断面がＵ字溝または逆大形状であるためと推察される。藤原は、環ゴウ集落を、環ゴウの中に住居跡が認められるものをⅠ型、住居跡が認められないものをⅡ型とし、規模の大中小、立地条件（低地、台地または高地）によって地域毎の分類を行った（表3)。

表３　環ゴウ集落の分類一覧表

	前期前半	前期後半	中期	後期
九州	Ⅰ-a2、Ⅱ-a2?	Ⅱ-a2		多様な形態
山陰 瀬戸内		Ⅱ-a3 Ⅰ-a1	Ⅰ-a2 Ⅱ-a3	Ⅰ-a2 Ⅱ-a3
近畿		Ⅰ-a1	Ⅰ-c1	Ⅰ-c1
中部		Ⅰ-a1	Ⅰ-b2	Ⅰ-a3（北陸）
関東			Ⅰ-b2	Ⅰ-b2

環ゴウ集落の種別：集落を囲む（Ⅰ）、集落以外を囲む（Ⅱ）、立地条件：低地（１）、台地（２）、高地（３）、規模：小（a)、中（b)、(c)　　（出典：藤原哲「弥生社会における環濠集落の成立と展開」）

弥生前期の九州では、筑紫、肥前、宗像および豊前に台地上の環ゴウ非集落（Ｖ字溝）が認められる。環ゴウ非集落の内部には食物の貯蔵穴が検出されることから、この環ゴウは動物から食物を護るためのものであると考えられる。環ゴウ集落がないということは、前期の九州は争いが殆どなくて平和であったことを示す。図４は、これらの環ゴウ非集落を、甕棺の出土地[17]および松菊里型住居跡[20]とともに地図上にプロットしたものである。上述したように、台地上の環ゴウ非集落は倭族によって、甕棺墓制は倭人族によって、松菊里型住居跡は古朝鮮族によって伝えられたと考えられる。松菊里型住居跡は、倭族の台地上の環ゴウ非集落と同様に筑紫、肥前および豊前に検出されている。ところが、甕棺墓は肥前、肥後および筑紫で出土するが、宗像や豊前では出土しない。従って、倭族と古朝鮮族は北部九州全体に住みついたが、倭人族は西九州（肥前、肥後および筑紫）にのみ居住していたと考えられる。

前期前半の瀬戸内以東には環ゴウ集落・非集落は認められないが、後半になると瀬戸内、近畿および東海に低地の環ゴウ集落が認められる。このことは、何れかの渡来人が東へ移動し、前期末までに東海に達したことを示す。この人種が水稲耕作を近畿・東海に伝えたもの

と考えられる。

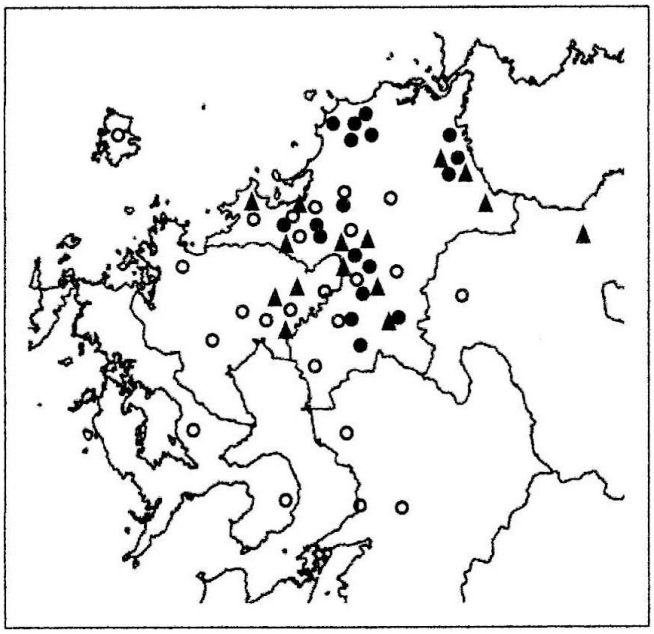

図４　弥生前期の甕棺、環濠集落および松菊里型住居跡の分布
環濠集落（○）、環濠集落（●）、松菊里型住居跡（▲）

４－４　弥生中期の渡来系弥生人

中期になると、北部九州の台地上の環ゴウ非集落が消失し、環濠や環壕は殆ど造られなくなった。一方、瀬戸内では低地の環ゴウ集落は消失して、高地に環ゴウ非集落が築かれるようになった。また、近畿では、環ゴウ集落が大型化した。これらの変化から二つのことが示唆される。一つは、中期になると九州では小国家が形成されるようになったということである。このため、食料は高床式倉庫に保存されるようになり、動物から食糧の貯蔵穴を守る環ゴウは不要になったものと推察される。他の一つは、人口が増えたために、九州東北部の倭族が東方への移動を開始して瀬戸内を征服したということである。このことは、中期になると瀬戸内東部と近畿に高地性集落が築かれること [26]、大分県～瀬戸内～淡路島で祭祀用銅剣が出土すること [27]によって裏付けられる。瀬戸内や近畿に移り住んだ人たちは常に西（九州）からの攻撃の脅威にさらされていたので、防御のために環ゴウ集落を築いたものと推察される。そして、実際に、中期になると瀬戸内は倭族の侵略を受けた。このため、四国東部と近畿の人びとは高地性集落が築き、環ゴウ集落を大型化して防御を固めたものと考えられる。

４－５　瀬戸内・近畿・東海に移り住んだ渡来系弥生人

藤原 [19]によれば、瀬戸内、近畿および中部で検出される低地の環ゴウ集落はＵ字を呈していることが多い。低地の環ゴウ集落は水稲耕作の関連が考えられ、実際に水田跡や水稲耕

作関連遺物が検出された遺跡も多い。藤原は言及していないが、U 字溝は江南の環濠集落のように水を湛えていたと推察される。実際、唐子・鍵遺跡（奈良県）、池上・曽根遺跡（大阪府）、下郡遺跡（滋賀県）はU字溝の環濠集落であり、水田跡や水稲耕作関連遺物を伴っている。このように、江南から伝わった環濠集落は、九州ではなく、瀬戸内、近畿および中部で検出される。また、九州では朝鮮型の石包丁が出土するが、近畿地方では江南型の石包丁が出土する。それにも関わらず、これらの地域では甕棺等の倭人族の存在を示唆する遺物は検出されない。一方で、田村遺跡（高知県）と朝日遺跡（愛知県）は V 字溝の環濠集落であり、集落内に松菊里型住居跡が検出されなど、朝鮮系渡来人の痕跡が認められる。松菊里型住居跡は、山口県、広島県、愛媛県、香川県、高知県、徳島県、岡山県、兵庫県、大阪府、奈良県、三重県、愛知県で検出されている。四国、中国、近畿および東海では銅鐸が出土するが、九州でも松菊里型住居の分布の中心がある吉野ヶ里近辺で銅鐸とその鋳型が出土している。銅鐸のルーツは、中国中原地域の殷周青銅器文化で使われた鈴・鐘にあり、これが紀元前四～前三世紀ごろ中国東北部から朝鮮半島にかけて伝わり、日本列島の銅鐸の直接的祖先である「朝鮮式小銅鐸」となったと考えられている。これらのことは、瀬戸内、近畿および東海に低地の環濠集落を築いて稲作を行ったのは古朝鮮族であることを示唆する。このことは、HLA ハプロタイプ B52-DR2 グループが中国大陸北部から朝鮮半島を経て北九州・近畿へ伝わったとの事実によって裏付けられる [3)]。上述したように、古朝鮮族は灌漑施設により河川等から水を引いて水稲耕作の技術を持っていなかったので、倭人族を連れて移動し、倭人族に倣って水稲を耕作したものと推察される。その結果、畿内に江南に類似した水稲耕作文化（環濠集落と江南型石包丁）が伝わったものと考えられる。

近畿では弥生時代末まで銅鐸祭祀が行われたが、九州では銅鐸は中期末に埋納されてしまう。このことは、九州の古朝鮮族は倭族や倭人族との勢力争いに敗れたことを示す。倭族と倭人族は同族であるが、古朝鮮族は異民族である。倭族・倭人族と古朝鮮族の間には民族間対立があったので、古朝鮮族は九州から東に移動して瀬戸内、近畿、東海に居住するようになったものと推察される。

４－６　その他の渡来系弥生人

HLA ハプロタイプの分析によって、満州・朝鮮半島東部から日本海沿岸へ渡ってきた B44-DR13、B7-DR1 系統と、中国南部から琉球諸島を経て太平洋南側へ渡ってきた B54-DR4 系統がいたことがわかっている [3)]。出雲～北陸に分布する四隅突出型墳丘墓の起源は紀元前 3 世紀に始まると言われる高句麗の積石塚であるとされる。紀元前 108 年、漢の武帝は衛氏朝鮮を滅ぼし、漢四郡（玄菟郡、楽浪郡、真番郡および臨屯郡）を置いて直接支配に乗り出した。この時、漢の圧政から逃れて満州も居住する人びとが出雲に渡ってきたと考えられる。現在の満州民族は、17 世紀に清を興したツングース系民族であるが、当時は濊が住んでいた処に夫余が南進して紀元前 1 世紀に高句麗を建国した。従って、満州から日本に渡ってきた人びとは濊、夫余或いはその混血であると推察され、筆者はこれらの人びと

を古満州族と呼ぶことにする。

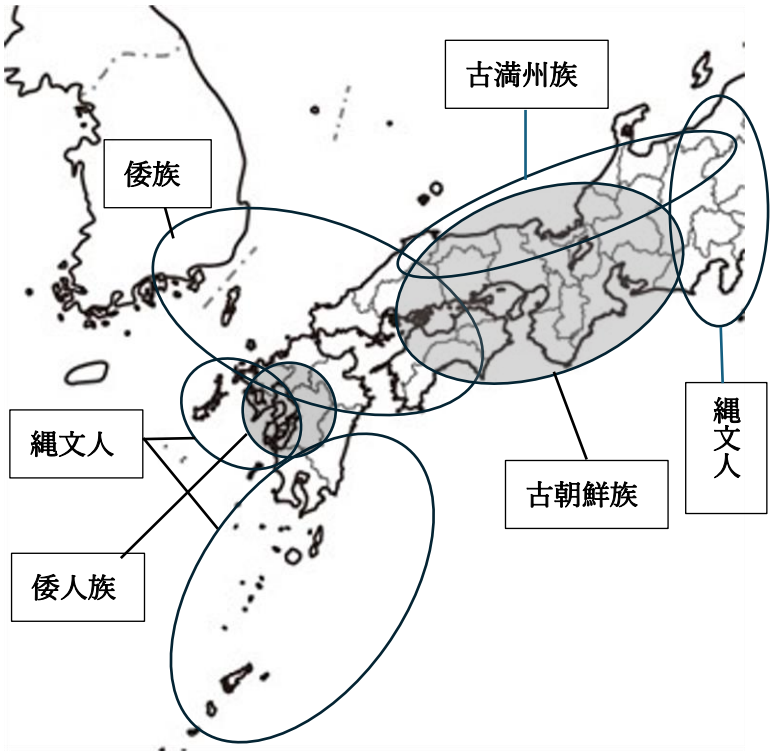

図５　弥生時代後期の日本列島の民族の分布

日本に渡来した HLA ハプロタイプ B54-DR4 系統については明らかでない。その痕跡の遺跡や遺物も認められないことから、他の系統と混血化したものと推察される。このように、縄文時代末期に倭人族、倭族および古朝鮮族が渡ってきて、倭人族は筑紫と肥前・肥後に、倭は北部九州と土佐・伊予・讃岐・淡路島に、古朝鮮族は九州北部から中部までの西日本一帯に居住するようになった。しかし、九州の銅鐸は中期末に埋納されてしまったことから、九州の古朝鮮族は勢力を失い、倭族や倭人族と混血化したものと考えられる。さらに、倭族は瀬戸内まで進出した。その結果、倭人族は西九州に、倭族は北部九州と瀬戸内に、古朝鮮族は中四国、近畿および東海に、山陰～北陸には古満州族が、その他の地域には縄文人が居住するようになったと考えられる（図５）。

４－６　弥生後期の北部九州

倭人族は北部九州以外には居住していなかったから、魏志倭人伝の舞台は北部九州である。その九州では、中期までは環濠・環壕集落は殆ど築かれなかったが、後期になると、

非常に小さい円形の環ゴウ、小さい方形の環ゴウ、大型の方形環ゴウ、平地の大型円形環ゴウ、高地性の小さな環ゴウ、台地上の大型環濠、丘陵上の大型環ゴウなど、多様な環ゴウ集落が出現する[19]。これらの環ゴウ集落が存在する地域は福岡平野と筑後平野・佐賀平野に集中しており、福岡市には野方中原遺跡、比恵遺跡、今宿五郎江遺跡、および雀居遺跡が、また佐賀平野には、原古賀三本谷遺跡および町南遺跡（佐賀県みやき町）、吉野ヶ里遺跡（佐賀県吉野ヶ里町）、岡浦遺跡、惣座遺跡および榎木遺跡（佐賀市）が、筑後平野には千塔山遺跡（佐賀県基山町）、三国の鼻遺跡（小郡市）、平塚川添遺跡および西の迫遺跡（朝倉市）がある（図６）。福岡市、神崎市および小郡市は、甕棺が集中的に出土することでも知られている（図７）。これらのことは、福岡平野、佐賀平野および筑後平野が北部九州の三大勢力圏であって、この地域に興った国が北部九州の覇権を競っていたことが推察される。福岡には奴国が興り、西暦 57 年に後漢の光武帝に朝見して光武帝から印綬を賜るなど、栄華を極めた。一方、佐賀平野の勢力は神埼に国を作り、吉野ヶ里遺跡はその都の跡であると考えられる。吉野ヶ里遺跡は、物見櫓や神殿と思われる大型高床建物が見つかるなど、魏志倭人伝の記述が事実であることを証明した。遺跡の最盛期は３世紀頃で、邪馬台国の時代である。また、神埼は福岡市の南に位置し、邪馬台国は奴国の南にあるとの魏史倭人伝の記述と一致する。このため、吉野ヶ里遺跡を邪馬台国に比定する説がある。しかし、吉野ヶ里遺跡のＶ字状の環壕は、この集落の住民は倭族であることを示唆する。また、この遺跡は古墳時代が始まる頃には消滅する。従って、吉野ヶ里遺跡は邪馬台国ではない。

図 6　弥生後期における北部九州の環ゴウ集落

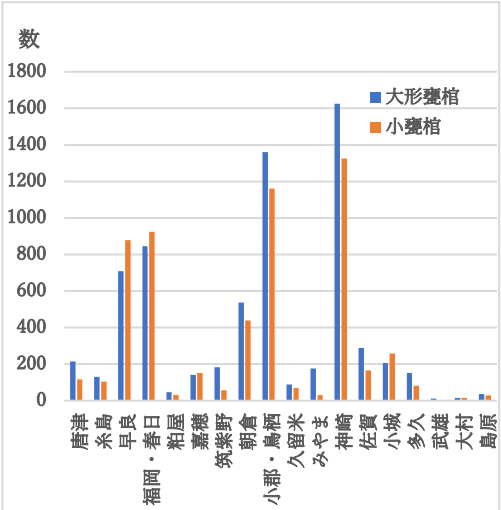

図７　甕棺出土数の地域比較

筑後平野の朝倉市甘木にも、吉野ヶ里遺跡に匹敵する遺跡がある。平塚川添遺跡は６重の環濠と５重の柵列で囲まれ、約 300 の竪穴式住居跡と約 150 の掘立柱建物跡が中央に集中して検出されている。集落には、楼閣、高殿などの大型建築物の跡も確認され、集落は南北約 220 メートル、東西約 120 メートルの楕円形で、面積は約 20 ヘクタールである。この遺

跡からは大量の土器、玉に加え、倣製鏡二個、銅矛片一個，銅鏃 4 個、木製の農具、建築資材、漁具が出土した。また、平塚川添遺跡に隣接して双子の遺跡といわれる平塚山の上遺跡があり、二つの遺跡は一部でと濠を共有している。平塚山の上遺跡では約 2.5 ㎢の範囲に竪穴住居約 200 軒、掘立柱建物 100 棟が確認されている。しかも、両遺跡は古墳時代初頭まで継続した。実は、平塚・小田遺跡群の本は、平塚川添遺跡から少し離れた一ツ木・小田台地（福田台地）の上にあるといわれる。この区域は工場や住宅地があるために、発掘はほとんど進展していない。部分的に発掘され、紀元前の栗山遺跡では前漢鏡などを埋収した王墓が確認され、絹も出土している。朝倉市甘木がある筑後平野は九州一の穀倉地帯である。当時は現在よりも海面が高かったため、佐賀平野は現在よりも狭かった。このため、筑後平野の朝倉は、佐賀平野の神埼よりも水稲の収穫量がはるかに多かったので、朝倉の平塚・小田の国は、神埼の国を従属させることになったと推察される。九州一の大河である筑後川流域に六重の環濠で囲まれた集落がある風景は、長江流域の風景を彷彿とさせる。「太伯の後」を称した倭人族の本拠地は朝倉であったと考えられる。

５．まとめ

倭または倭人と呼ばれる人びとは山東省および江蘇省に居住していた。江蘇省と山東省は淮河で南北に隔てられていて、北は乾燥した気象条件の下に畑作の黄河文明が栄え、南は湿潤な気候の下に稲作の長江文明が行われた。このため、山東省と江蘇省の人たちは文化的にも物理的にも分断されて、前者は倭、後者は倭人とよばれるようになったと考えられる。倭族の一部は、時期は不明であるが、寒冷化による食糧不足あるいは戦乱を避けて、朝鮮半島南部に移り住むようになったと考えられる。

紀元前 473 年、呉は越との戦争に負け滅亡した。この時、江蘇省に居住していた倭人族は東シナ海を渡って、北部九州に水稲耕作と甕棺墓制を伝えたと考えられる。一方、朝鮮半島では、紀元前 5 世紀後半に燕が朝鮮半島南部まで進出した。朝鮮半島に居住していた倭族と古朝鮮族は、この戦乱を逃れて北部九州に渡ってきたと考えられる。北部九州には倭人族、倭族と古朝鮮族が居住するようになったが、倭族が勢力争いに勝利して北部九州を席巻した。このため、九州では朝鮮系の石包丁が使われることになったと考えられる。倭族の足跡はＶ字溝の環ゴウ非集落によって、古朝鮮族の足跡はＵ字溝の環ゴウ集落（恐らく環濠集落）と松菊里方住居跡によって追うことができる。勢力争いに敗れた古朝鮮族は東方に移動し、弥生時代前期末には中部地方にまで達した。古朝鮮族は水稲耕作技術を持っていなかったので、倭人族の技術を模倣して瀬戸内～中部に江南型の環濠集落が築き、近畿に江南型石包丁を伝えたと考えられる。弥生中期になると北部九州では人口爆発が起こり、東北九州にいた倭族は東に移動し、淡路島にまで達した。その結果、西九州に倭人族、北部九州と瀬戸内に倭族、中四国、近畿および東海に居住するようになった。

九州では、福岡平野、佐賀平野および筑後平野に人口密集地が生じ、福岡平野に奴国が勃興し、佐賀平野の吉野ヶ里には倭族が国を作り、筑後平野には倭人族が朝倉市甘木に作った。

甘木の平塚川添遺跡は九州一の大河である筑後川流域に、六重の水を湛えた濠に囲まれて存在し、その風景は長江流域を彷彿させる。従って、甘木が「太伯の後」を名乗った倭人族の本拠地であると考えられる。

参考文献

1)　中橋孝博　日本人の起源　古人骨からルーツを探る　講談社（2005）

2)　崎谷満　DNA でたどる日本人 10 万年の旅　昭和堂（2008）

3)　徳永勝士　逆転の日本史編集部、日本人のルーツがわかる本　p264-280　宝島社文庫（2008）

4)　新井宏　考古学における新年代論の諸問題　愛媛大学アジア古代哲文化研究センター・瀬戸内考古学研究会共催　第 13 回アジア歴史公演会（2013）

5)　宮本一夫　農耕の起源を探る　吉川弘文館（2009）

6)　河野通明　日本列島への稲作伝来の２段階・２系統経路の提起　神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料センター編　22　p111-143（2021）

7）橋口達也　炭素 14 年代測定法による弥生時代の年代論に関連して　日本考古学 10(2003)

8）藤尾慎一郎　AMS-炭素 14 年代測定法が明らかにした日本の鉄の歴史　鉄と銅 91(2005)

9)　福岡県教育委員会　今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書　第 9 集　石崎曲り田遺跡（1984）

10）神澤秀明・角田恒雄・安達登・篠田謙一　佐賀県唐津市大友遺跡第 5 次調査出土弥生人骨の核ＤＡ分析　国立歴史民俗博物館研究報告　第 228 集（2021）

11）内藤芳篤　西九州出土の弥生時代人骨　人類誌 79(3) 236-248(1971)

12）安本美典　邪馬台国の会　瑞の陵古墳と竪穴式古墳の前方後円墳の起源　第 212 回講演会（2003）

13）北郷泰道　南九州の果実と結実～第 3 の弥生文化とそれから　大阪府立博物館　終期特別展考古学セミナー第 3 回（2007）

14）佐藤洋一郎　稲の日本史　角川書店（2002）

15）寺沢薫　日本の歴史０２　王権誕生　講談社（2000）

16）藤尾慎一郎　今村峯雄　山崎頼人　弥生時代井堰の年代：福岡県小郡市力武内畑遺跡の年代、国立歴史民俗博物館報告　第 153 集（2009）

17）藤尾慎一郎氏　九州の甕棺　国立歴史民俗博物館報告　第 21 集（1989）

18）橋口達也　甕棺と弥生時代年代論　雄山閣（2005）

19）藤原哲　弥生時代における環濠集落の成立と展開過程　総研大文化科学研究第 7 号（2011）

20）伊藤秀紀・永井宏幸・影山誠一　「松菊里型竪穴住居」の受容と展開　愛知県埋蔵文化財センター年報（1999）

21）篠田謙一　日本人になった祖先たち　日本放送出版協会（1999）
22）藤尾慎一郎　福岡平野における弥生文化の成立過程　国立歴史民俗博物館報告　第 77 集（1999）
23）福岡市教育委員会　福岡市埋蔵文化財調査報告書　第 366 集　那珂 11（1994）
24）福岡市教育委員会　福岡市埋蔵文化財調査報告書　第 95 集　有田七田前遺跡（1983）
25）福岡市教育委員会　福岡市埋蔵文化財調査報告書　第 407 集　雀居遺跡 3（1995）
26）金関恕･置田雅昭･熊崎保　歴史群像特別編集　最新邪馬台国論　p38 学習研究社（1989）
27）金関恕･置田雅昭･熊崎保　歴史群像特別編集　最新邪馬台国論　p29 学習研究社（1989）